



244号

2019/6

日中文化交流市民サークル'わんりい'
町田市三輪緑山 2-18-19 寺西方
〒195-0055 ☎ : 044-986-4195
<http://wanli-san.com/>
Eメール:t_taizan@yahoo.co.jp2018/7/1



苗(ミャオ)族：中国南部の貴州省や雲南省、またはラオスやベトナム、タイなどの国で暮らす古い民族。何世紀にもわたり、100以上の氏族へと分岐して、それぞれ独自の文化様式を備えるようになった。文字を持たないが、歌で民族の物語を伝え、刺繍で神々や生活を描く。ミャオ族女性は髪飾りや首飾りに銀製の装飾品を愛用する。他の民族と比べて服装から種族の識別がしやすい民族である。

(貴州省寨県麻鳥村苗寨にて 2018年7月 チベット高原初等教育・建設基金会代表 烏里烏沙撮影)

'わんりい' 2019年6月号の目次は20ページにあります

今月も、日本にはない言葉です。

・>・>・>・>・>・>・

昔、王振という宦官がおりました。彼は常日頃、自分が持っている権限を利用して自分の力の拡大を図り、その勢力で更にうまい汁を吸っていました。朝廷が開かれるたびに、地方の役人は皆、彼の歡心を得ようと、様々なお土産を持ってくるのが常でした。

于謙うけんという一人の地方官僚がいて、いつもなんのお土産も持ってきませんでした。友人が彼を諫めて言いました：「たとえ高価なものでなくても、土地の名産、例えば線香、キノコ、ハンカチなどを贈って、誼よしみを通じておく方が良いぞ！」

すると于謙は笑って両袖をふりながら、ユーモアたっぷりに言いました：「土産物なんか持っていないよ、私の両袖には爽やかな風が吹き抜けるだけだ！」
于謙はこのような方法で、一部の汚職官吏を皮肉りました。官吏が賄賂をとらず清廉潔白であることを示す、「两袖清風」と言う言葉はここから出たのです。

・>・>・>・>・>・>・

言葉の意味：両袖の中には清風以外、何もない。清廉潔白な官吏を指している。転じて、貧乏で財産が何もない時も使う。

使い方：祖父は一生涯教師を続け、退職した時、財産は何もなかったが、優れた教え子が沢山育てていた。

・>・>・>・>・>・>・

今回もまた、汚職をしない官吏の話ですが、日本にはこれに対応する言葉は見当たりません。勿論、日本にも汚職や贈収賄はありますね。日本で特徴的なのは「付度」という贈賄です。「付度」を受けた方は、頼んだわけではなく先方が勝手に「付

度」をしたのだからと知らん顔、収賄の意識はありません。「付度」された人が、甲乙つけがたいA案とB案の選択を任された時は、「付度」してくれた人が関わったA案を選択するでしょう。

若しかしたら、A案はB案より少々劣るかも知れないけれど、あの時「付度」してくれたのだから、ここではA案を選択しようと「付度」するかもしれません。こうなれば立派な贈収賄ですが、立証することは難しいですね。

これに対して、昔の中国では半ば公然と贈収賄が行われていたようです。社会的なしくみもそれを助長したのでしょう。一族が纏まって生活している中で、優秀な子供が生まれると一族を挙げて勉強を支援し、科挙に受かって役人に成るのを援助します。役人に成った子供は、世話になった一族の人々に出来る限りの恩返しをします。中国で役人に成ることは、ステータスが一段も二段も上がることで、お金がもうかり、職務に応

じた権力も手に入り、それらを使って一族に便宜を図ることは、特に阿漕なことをしない限り、社会的に容認されたことだったようです。

北京で生活していた頃、テレビドラマで、清朝最盛期、乾隆帝のお気に入りの官僚の収賄の話を見ました。皇帝の寵愛を笠に着てやりたい放題、最後には地方から皇帝への贈り物である素晴らしく大きな玉を巧妙な方法ですり替えて、自分の家の庭へ運んでしまう話で、汚職もこんなにスケールが大きいと痛快感を覚えました。

この収賄官僚は和珅わしんと言って、乾隆帝の晩年から嘉慶帝の初めまで、清朝政府の大臣を務めた人です。彼の邸宅は死後没収され、現在は、保存状態の良い王府として有名な、什刹海じゅうさつ付近の観光名所の一つ恭王府博物館となっています。

中国は汚職のスケールもけた違いです。



満
柏
氏

挿絵：満柏氏

Jūn zǐ yì yǒu qióng hū
君子亦有窮乎？
 またきゆう
君子も亦窮すること有るか

桜美林大学名誉教授 植田 渥 雄



魯の君主定公は即位後、頻発する内紛を抑えるため、孔子の意見によく耳を傾け、最終的には孔子を宰相格の大司寇（刑務長官）に取り立て、重要な政務を委ねました。その結果、国防も完備し、内政も格段に安定しました。孔子の執政下で魯が強大になることを恐れた隣国の齊は、孔子と定公を引き離すために女楽（美女歌舞団）を送り込んできました。かつて魯国で実権を握っていた貴族の季桓子もこれに同調して斉国の陰謀に加担し、孔子に無断で女楽を受け入れました。その結果、定公は政治を投げ出して日夜遊興に耽るようになり、魯国は再び混乱状態に陥りました。これに絶望した孔子は官位を棄て、新しい君主を求め、弟子たちを引き連れて諸国周遊の旅に出ます。孔子55歳の時のことでした。

しかし、この旅は苦難の連続でした。時は春秋時代、各国が覇権を争っていた時代のことです。政治や軍事に関する孔子の手腕に期待する君主はいても、為政者に高度な道徳性を求める孔子の理想を素直に受け入れる君主はいませんでした。そればかりか、生命の危険にさらされることも屡々でした。中でも苦難を極めたのは衛を出た後、陳から蔡を経て楚の地へ向かう道中でのことでした。折りしも陳国は内乱の真ただ中で、この煽りを受けた孔子一行は糧食を絶たれ、飢餓に苦しみました。多くの弟子たちは立つことさえできなくなりました。しかもこの状態は7日間も続いたということです。まさに万事休すの状態です。

この時、子路が孔子に対して発したのが表題の言葉「君子も亦窮すること有るか」です。『論語』には次のように記されています。

「在陈绝粮。从者病莫能兴。子路愠见曰：『君子

亦有窮乎？』(Zài chén jué liáng。Cóng zhě bìng mò néng xīng。Zǐ lù yùn jiàn yuē：『Jūn zǐ yì yǒu qióng hū？』)」(陳に在りて糧を絶つ。従者病みて能く興つ莫し。子路愠み見て曰く「君子も亦窮すること有るか」と)〈衛霊公第十五〉。生命の危機に瀕しながらも孔子は特に慌てる様子もなく、平然としていました。「五十にして天命を知る」とはこのことをいうのでしょうか。一方、子路はというと、敬愛してやまない恩師の身の上に万一のことが起こったらどうしよう。自分の命以上に孔子のことを気遣っていた子路は、この有り様を見るにつけ気が急ぐばかりです。そこでつい恨み言を口に出してしまいました。「君子でも窮することがあるのですか」と。これは愛弟子の気持ちも知らぬげに平然と構えている孔子への、精一杯の皮肉でもありました。これに対して孔子は次のように答えました。

「君子固窮。小人穷斯濫矣 (Jūn zǐ gù qióng。Xiǎo rén qióng sī làn yǐ)」(君子固より窮す。小人窮すれば斯に濫る)。君子だってむろん窮することはあるさ。ただ小人が窮すると、とかく取り乱すものだな、と。子路に限らず、たいていの人は困難に出くわすと慌てふためくものです。これは小人たる者の性であるといってもいいでしょう。しかし君子、つまりリーダーたる者はそうであってはならない。リーダーが取り乱せば組織はもたない。「窮すれば通ず」(『易』繫辞伝下) という格言も孔子の時代にはすでにあつたようです。孔子がこの窮状を逆手にとって子路に伝えたかったのは、リーダーとしての心得、いわば孔子一門の帝王学であつたのかもしれませんが。

(わりりい「中国語で読む漢詩の会」講師)

お爺さん三人の大連の旅(4)

寺西俊英

前号の8月14日(2018年)の続きである。旅順を後にして大連市の西部にある星海広場に向かった。まだ夕暮れには時間があつたのでお二人に有名な広場を是非見ていただこうと立ち寄った。以前にも書いたことがあるが、北京の天安門広場と一二を争う広さである。この場所は以前星海湾に面したゴミ処分場であつたが、大連人に人気のあつた薄熙来市長が4年の歳月をかけ1997年に美しい広場に生まれ変わらせた。政争に敗れた形になつたが今でも彼の時代を懐かしんでいる人は多い。ここはちょうど一週間前まで第21回ビール祭り(中国国際啤酒節という)が行われていて、もう少し早く来ればお見せできたのに!と残念だが仕方がない。ビール祭りは青島市と共に有名である。青島市は1903年にドイツの投資家が故国の醸造技術を導入してビール製造を始めた、中国のビール発祥の地であるだけにビール祭りの歴史も大連市より長い。2012年に青島に行った時ビール祭りの会場まで足をのばしてみたが、その時が22回目であつたので今年は29回目のはずである。祭りには世界各国のビールが販売され、舞台が設置されて歌や踊りで大変にぎやかである。音響がうるさいし、私はビールは飲めないものであまり行きたいとは思わないが。

14日は夏休みの為か広場は家族連れも多く、皆思い思いに楽しんでいた。我々は、彫刻広場にある大連市の市制100年(1899年~1999年)の時設置した記念モニュメントである銅板に彫った市民千人の足形を見ながら海岸まで歩いて行った。沖合には数年前までは無かつた星海湾大橋が威容を見せていた。全長が6~7キロあつて観光用に造られたと思うが、市内から旅順方面へのバイパスの役割も果たしている。夜景が素晴らしく今夜食事の後、通行することにした。ホテルには夕方5時過ぎに到着し、各自部屋で一休みして30分後にロビーに集合することとした。夕食はここから歩いて15分くらいの「柏威年ビル」5階にある北京ダックのお店に、娘さん一家と一緒に食べようと李さんがセットしてくれご馳走に

なつた。時間になつたので李さんの案内でホテルから出てすぐの勝利広場の入口から階段を降りて行く。後ろにしっかりとついて行かなければ初めての人は迷子になりそうだ。勝利広場と言えば真ん中にロータリーのあるような広場を想像される方もあろうが、勝利広場という文字を見れば大連人は大連駅の近くを走る大通りの地下にあり、地下3階まである巨大で長い商店街のことを思う。ありとあらゆるお店が軒を連ね殆どのはこで間に合う。おまけに安いのでいつ行っても人、人、人である。長さはおそらく500メートル以上はあるのではないだろうか。前号で書いたもう一人の李さんの四川料理店は地下3階にある。

我々4人が着いてまもなく娘の陶さん一家が来た。李さんの姪と一緒にいる。8人の会食となつた。陶さんご主人の李春晶さんは同じハルピンの北にある伊春市の同級生で、優しい方で何を言われてもニコニコして感じがいい。姪は中学1年生で夏休みの間李さん宅に泊っているがこの子も静かな子で、こちらから話しかけると恥ずかしそうに答える。この一族は皆控えめで周りの空気が読めて日本人のようである。名前は李さんの弟の子で李さんと言ひ、陶さんの1歳の娘の名も李思錦さんと李姓である。この子は我々3人で持ってきた6缶の日本製の粉ミルクですくすくと丈夫に育つことであろう。まもなく北京ダックを始めいろいろな料理が出てたちまちテーブルの上は料理の置き場の無いくらいになつた。和やかな雰囲気の中で美味しくいただいた。

夜8時近くになつたのでお開きにし、李さんの娘と子、姪の3人はタクシーで帰り我々は李春晶さんのBMWで星海湾大橋に向かった。完成してさほど時がたっていないのでトンネルのある取り付け道路はとても綺麗だ。いつの間にか大橋の一部に入っている。制限速度は60キロで監視カメラがあるためか、どの車も法定速度を守りとても中国とは思えない。そのうち丁度対岸が昼間に行つた星海広場が見えるところに来た。春晶さんは速度をぐっと落としスマホの撮影をしやすくし

てくれる。橋の七色のネオンと対岸のイルミネーションは観光名所に十分値する。橋の終わりの所でUターンしてくれ、また光のページェントを堪能することが出来た。この橋は上下2層になっていて風景も少し変化があった。対向車が来ないので安心して景色を眺めることができた。明日も李さんは大連市内を案内してくれるので、我々をホテルに送って二人は帰って行った。

8月15日を迎えた。4日目の朝である。今日は小雨が降ったり止んだりの生憎の天候である。李さんは9時少し前にお土産に蜂蜜の瓶を3瓶持って来た。私の部屋に行き帰国するまでこぼれないようにしたいと言うのでまた戻ると、それぞれサララップで口を覆いもう一度蓋を締めた。春晶さんの実家は養蜂家なのだ。花の咲く木の名前は忘れたが、貴重な蜂蜜だという。お二人にそれぞれ渡してホテルをスタートした。今日は春晶さんは、昨年からはじめたホテル経営で忙しいようで、李さんはハイヤーで来てくれた。まず大連の観光の定番ともいえる、海沿いの切り立った崖が印象的な「老虎灘」に向かった。この場所には巨大な石造りの虎が設置されているが、不思議なことに見る角度でその頭数が違うのだ。私は、以前8匹と聞いた記憶があるがお二人は6匹ではないかと言われ、そう言えばそのようにも思える。虎の伝説があってこの名前が付いたと言われているが、その昔この辺りに虎が出たのであろうか？

ここでゆっくりしてもいいが、今日はこの度の旅行でお二人には最後の一日で明日は朝9時15分の飛行機で日本に戻られるため、一つでも多くの観光地をお見せしたいので老虎灘から近くの「棒槌島」に移動した。棒槌とは、以前の中国で河原などで洗濯する時、衣類をたたく木製の道具であるが、今でも地方に行くとこの洗濯風景に出くわすことがある。島の形が棒槌に似ていることからその名前が付いた。島名は朝鮮人参が由来だという説もあるが私は洗濯道具説を採用したい。棒槌島はこの辺りの海沿いのリゾート地を言うが、沖合に見える島も棒槌島という。このリゾート地には二つの石灯籠を大きくしたような厳めしい入場門があり一人20元を取られる。三方を森に囲まれた広大な面積を持つが警備はしやすく造られているようだ。別荘、ゴルフコース(9ホール)、テ



人民日報の1面に掲載された棒槌島の海岸を歩く習近平と金正恩

ニスコートなどがあり中国要人の迎賓館である「棒槌島国賓館」がある。このホテルは、要人が来たときは一般客は締め出されるが、そうでないときは一般客も宿泊など利用できる。中華人民共和国が成立して10年後の1959年に完成し、当時は「東山ホテル」といい、周恩来や邓小平も宿泊したという。昨年5月7～8日に、(つまり我々が行った3か月前)北朝鮮の金正恩が習近平と2度目の会談をした時に宿泊し、会談後浜辺を二人で歩いた写真が新聞各紙の一面に掲載され一気に棒槌島は有名になった。金正恩の祖父である金日成もこのホテルに泊まったことがあるようで、習近平は彼の為に配慮したのかもしれない。海岸の真ん中あたりに人の高さより大きな自然石に毛沢東が書いた「棒槌島」の文字が刻まれている。石の近くには新聞の一面の写真をタタミ1畳大に引き伸ばした写真がアルミの枠の中に納められ立てかけられていた。これまでに私は一度遊びに来たことがあるが静かな浜辺であった。この日は小雨にもかかわらず海岸は大勢の観光客に占められていた。

最終回の次号は、満州国時代に大きな役割を果たした満鉄の本社の様子から書き進めたい。

(続く)

※日本古代の「国」とは？

平日本古代の「国」を、字引で探してみました。「ひとつの政府によって治められている地域」「古代から近世に至る行政単位のひとつ」「大化の改新の国郡制によって定められた」(三省堂：大辞林)、「ある一定の広がりを持った土地」「国家・国土・領土・領地」(三省堂：国語辞典)・・・などなど。どうもじっくりしませんが、“思うに”、現在の「県や町村」ぐらいの“群れ”といったぐらいと考えれば良

いのではないのでしょうか。

※「倭国」は、それらが集合した状態？

古代においてわが国が、中国や朝鮮諸国から「倭」と呼ばれ、自らも「大倭国」などと称していました。「倭国」は7世紀中に姿を消し、代って「日本国」が成立したといわれています。7世紀の時点で、関東以西の日本列島に、倭国以外の国家が存在したことを証明することは出来ません。「倭」が「日本」の古称であるなら、何時、如何なる理由で国号が替えられたのでしょうか？

※冊封の呪縛からの脱却

720年に成立した日本書紀編纂の目的から考察してみましょう。

日本書紀が編纂されていた7世紀後半から8世紀初頭、東アジアは激動していました。大陸では隋が唐に交代。律令を基盤とした強力な冊封^{注)}帝国の唐は領土拡大に邁進していました。朝鮮半島がその標的とされ、百済、次いで高句麗が滅亡し、統一新羅の時代となりました。この嵐は当然倭国にもおよびました。白村江の敗戦から壬申の乱に

至る波瀾万丈の時代を経て、新生日本となりました。

唐の張守節が著した「史記正義(736年)」に、「又倭国は、武皇后、改めて日本国と曰う」とあります。武皇后(則天武后)の統治時期に、倭国を改めて日本ということ宣言したのではないのでしょうか。また、30余年のブランクを置いた第八次遣唐使が「自らを日本人と名乗った際、言語も習俗も倭人そのものだが、国号は日本であり、古来大和朝廷の支配する国であった」という遣唐使に対して、唐の役人は「実を以て対(こた)へず」(旧唐書)、「情を以てせず」(新唐書)と記し、不信感をにじましたようです。

日本書紀は、その日本国の正史ですから、満身創痍の倭国の痕跡を残すことは出来ません。特に中国暦代王朝に対する朝貢外交の痕跡は除去されました。日本書紀に「卑弥呼や倭の五王」の記述がないのはそのためです。そして「歴代の中国王朝から冊封を受けたことがない」という日本国を誕生させたのです。国号の変更はひとへにかかって唐の冊封から逃れることでした。

※日本書紀は天皇の正当性を築いた

日本書紀の「神代の巻」(第一巻・第二巻)で語られている神話は、神々の系譜のかたちをとっています。一般的に「神」とは、時間を超越し、空間をも超越するはずですが、日本書紀の神々は「系譜」化して人間界になぞらえています。そうすることによって、神々と「天皇」が延長線上に繋がっているのです。

日本書紀は、7世紀末から8世紀初期、ちょうど日本国建国の時期に、日本建国を正当化し、天皇という世襲制の君主の正当性を裏付ける目的で編纂されたのです。つまり、日本書紀の神話は、日本天皇は、天から降りてきた神々の「正統な子孫」であると言っているのです。

※司馬遷が築いた「正統」の観念

「史記」の最初に置かれている「五帝本紀」。「五帝」とは、黄帝に始まる五人の神話上の「天子」（皇帝の別称）となって、相次いで天下（世界）を統治した、となっています。司馬遷がここで「天下」と呼ぶ地域は、彼が仕えた前漢の武帝の支配が及んだ範囲のことで、現代人から見れば、天下は「中国」の同義語です。しかも黄帝の事跡として司馬遷が叙述した事柄は、全て現実の武帝の事跡と重複します。

神話の黄帝と現実の武帝とをつなぐものは「正統」という観念です。「正統」の歴史観では、どの時代の「天下」にも天命を受けた「天子（皇帝）」が必ず一人いて、その天子だけが天下を統一する権利を持っています。その「正統」は、五帝の時代には「禪譲」によって、賢い天子から賢い天子へと譲られました。

※史記の「国家」という観念

司馬遷が「史記」で書いていることは、「皇帝の正統の歴史」です。世界史でもないし、中国史でもありません。第一、司馬遷の時代には「中国」という観念も、「中国人」という観念もありませんでした。「史記」では、「天下」を「中国」と「蛮夷」という二つの地域に分けていますが、その「中国」は、前漢の帝都・長安がある陝西省の渭河の渓谷から、河南省・山東省の黄河の中～下流域へかけての、東西に細長い地帯だけです。

天命は、どんな時代でも天命だから、その天命を受けた正統の天子が治める天下には、時代ごとの変化があってはならない。もし変化があれば、それは天命に変動がある前兆になります。この理論の前提には「天変地異」があります。「天変地異」が起るのは、皇帝の「徳」に欠けるところがあり、天が皇帝に不満であることを示すと解釈されます。「徳」というのは、道徳でもないし、倫理でもあり

ません。「徳」は「能力」であり、「エネルギー」です。「天変地異」は、皇帝の体に備わっているエネルギーが衰えた証拠であり、天下を統治せよという天命を皇帝が果たし得ないことを暗示させる言葉です。

※「古代中国」が日本に有る

「神々から天子」、「神々から天皇」。この連続性は、偶然ではないでしょう。唐による冊封を避ける一方で、史記から学ぶ。日本という国は、「良いものは学ぶ」というのが伝統です。

最後に、ジャーナリストの中島恵さんのレポートをご紹介します。

「菅義偉官房長官による発表が行われたのは午前11時40分過ぎだったが、それから数分も経たないうちに、中国共産党機関紙「人民日報」でも「日本の新元号」に関する発表があった。中国の主要紙である「環球時報」などいくつもの媒体でも、同じような報道が続き、日本のメディアとほとんど変わらないほどの素早さだった。また、マスコミの報道を追いかける形で、個人がSNSに投稿する文章が目に見え込んできた」。

中国ではここ数年、「国学」への関心が以前よりも高まっている。日本では古くからこの分野の研究が進み、「論語」などに代表されるように、日本で出版されている中国古典のレベルは高く、また、日本社会にも「中国からやってきた文化」は知らず知らずのうちに浸透している。だが、“本家”の中国では、文化大革命などの影響で、これらの古典は長い間、軽んじられたり、日の目を見なかったりするような風潮があった。ここ数年、中国では経済的な成長と比例するように、人としての成長を求める動きがあり、その基盤となる古典ブームが巻き起こっている。“本家”としての自覚に目覚めつつあると感じるのだ。私は、「この傾向」を歓迎します。

丹巴には女王谷の祖先が凡そ 2000 年前にシャンシュン(中国語で象雄)から移民して来た時に携えて来たボン教が色濃く残り、当時の生命を司る女神であった「湖の女王」も姿や呼

び名を変えて一部に伝承されています。湖が生命を司る女神になる理由は、チベット高原一体では湖の水が人や家畜や畑作物の命を制したからです。



写真1：ハーモルツィは左手に生命を与える薬瓶を持ち、右手に宝物の鏡を持ちます。

女王谷でこの女神を伝える壁画は、丹巴に在る約 1000 年の歴史を持つボン教のお寺の庫裏に有る「生命を与える女神ハーモルツィ(写真1)」と、約 800 年の歴史を持つ領主の館跡に残るマニ堂の門の右側に有る「生命を奪う女神ブルウィ或いはムルウィ(写真2)」だけで、他は高僧の伝承だけに止まっています。「生命を与える女神ハーモルツィ」は、次回「四姑娘山・写真だよりNo. ④⑤女王谷の神々(3)」でご紹介するボン教の最高神スパ・ギャルモに並んで大きく描かれ、高い格付けを維持して



写真2：ブルウィは右手に生命を奪う矢を持ち、左手に宝物の鏡を持ちます。壁画下方の文字は土地を護る白い女神を意味します。



写真3：生命を司る女神(復元画)

います。「生命を奪う女神ブルウィ
或いはムルウィ」は、前回「**四姑娘
山・写真だよりNo. ④女王谷の神々
(1)**」でご紹介したモルド山神と対
になって描かれ、これも高い格付け
を維持しています。

どちらもギャロン・チベット語の
方言の一つで使われる呼び名です
が、一つの郷村の中でも発音にバリ
エーションが有ったり、同じボン教
の寺の中でも僧の世代によって名前
や意味が違います(学ぶ経典が異なる)。また宗
派が異なる一部のチベット仏教の高僧にもこ
れらの女神が口頭で伝承されていますが、同
様に名前や意味が違っていています。なお古代チ
ベット文化の研究で知られるJ.V.Bellezzaさん
のお話に拠りますと、前述の二つの女神は元々
の「生命を司る女神」と姉妹関係にあるそう
です。

女王谷で「生命を与える女神」と「生命を
奪う女神」の二つに分かれる以前の元々の「生
命を司る女神」の姿の復元画(写真3)も挙げま
す。復元画はハーモルツィとブルウィの壁画
を合わせた物で、丹巴の絵師と共同でキャン
バスに原画を描き、その画像をパソコン上で
編集しています。

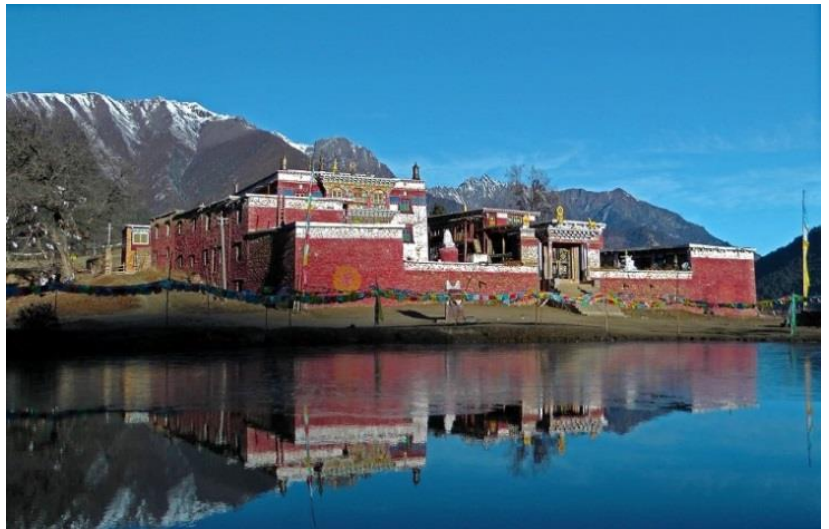


写真4: 背景になる山と前景の湖を備えた丹巴の古い歴史を持つボン教寺で、
ゲンザ(中国語で革什扎)公国領主に繋がる。

女神の顔は本来魔除けのために憤怒の形相
を取りますが、作者の好みで現代美人の風合
いを持たせ表情を和らげているため、専門家
の間では不評です。

この湖の女王は過ってはボン教の最高位の
女神の一つでした。しかし現在では、伝来し
た仏教等の影響で、8世紀以降ボン教の残され
た一大勢力圏となった女王谷以外では低位の
土地神として稀に伝承されているだけです。
なおシャンシュンを含む古代チベットでは、
山と湖を対にした神が信仰されていて、古い
歴史を持つボン教のお寺が建つ場所は背景に
なる山と前景の湖を備えています(写真4)。

●大川さんのホームページはこちら <http://rgyalmorong.info/index.htm>

<http://rgyalmorong.info/scholaweb/conts.htm>

▲お知らせ：女王谷の HP (<http://rgyalmorong.info/>) に、当地の風情を紹介するサンプルビデオ (MP4 形式 8MB 前後) 1 分余り×15 本を追加しました。日本語 HP に入って頂いて、先頭頁の左下に有る、「風情のあるビデオ」でご覧になれます。(<http://rgyalmorong.info/scholaweb/queenvideo-j.htm>)

張九齡の「鏡に照らして白髪を見る」

報告：花岡風子

今回のお題は張九齡（673?～740）の「鏡に照らして白髪を見る」という絶句でした。張九齡は、盛唐期の官僚政治家として有名ですが、詩人としても名を残しています。678年に今の広東省曲江県の貧しい家に生まれました。非常に優秀な人で、702年科挙に合格し、712年に即位した玄宗皇帝の宰相を勤めたこともあります。優秀であるだけでなく、非常に清廉潔白な人でもあったようで、善政を敷いた若き玄宗皇帝率いる盛唐の時代を支えた人物の一人です。

世はそれまでの門閥貴族の時代からエリート官僚の時代へ、つまり出身は問わず科挙に合格し、能力があれば政治の中核で活躍できるという時代への過渡期にありました。

貧しい地方出身者が一国の宰相にまでなったわけですから、当然のごとく、張九齡を応援してくれる人もいれば、足を引っ張る人物もいたようです。

張九齡は時の宰相張説ちやうえつという人物に引き立ててもらいますが、貴族の親玉であった李林甫に疎まれます。そして張説ちやうえつの死後、李林甫の讒言により荊州（湖北省）に左遷されてしまうのです。

忠実かつ清廉潔白な張九齡を欠いた後、玄宗皇帝の時代は下り坂にさしかかります。玄宗は専ら楊貴妃を寵愛したため、その楊貴妃一族の兄貴分に当たる楊国忠が台頭してきます。李林甫と楊国忠との間に権力闘争が始まりました。李林甫の死後は、これも楊貴妃お気に入りの安禄山がのし上がって来て、楊国忠討伐に名を借りて兵を挙げ、かくして唐王朝は破滅の道へと突き進んでいきま

した。世にいう「安史の乱」です。

張九齡は、安禄山という人物の野心を早くから見抜き、玄宗皇帝に気をつけるようにと何度も進言していましたが、聞き入れられませんでした。後に、官を辞して故郷に帰る途中、この詩を詠んだ、と言われていています。その時の張九齡の無念の思いがこの詩にも滲みでています。

zhào jìng jiàn bái fà
照鏡見白发
zhāng jiǔ líng
張九齡

sù xī qīng yún zhì
宿昔青雲志
cuō tuō bái fà nián
蹉跎白发年
shuí zhī míng jìng lǐ
誰知明鏡里
xíng yǐng zì xiāng lián
形影自相怜

shù xī xīng yún de zhì
宿昔星雲の志
cuō tuō tāng bái fà de nián
蹉跎たり白髪の年
shuí kā zhī rán míng jìng de bǎi
誰か知らん明鏡の裏
xíng yǐng zì xiāng lián
形影自ら相憐れむを

一句目、「青雲の志」という言葉が目飛び込めます。良い政治を行いたい、その為に努力して出世しよう、という男らしい心意気が伝わってきます。

二句目、一転して挫折に心痛める白髪の老人像が浮かび上がります。

三句目、四句目で鏡に映る老いさらばえた自分とそれを見つめる自分が互いに慚愧の思いで憐れみ合っていることを誰も知らない、と自分の密や

かな感慨を吐露しています。

さて、三句目の「誰か知らん明鏡の裏」という一句は、李白の『秋浦の歌』の三、四句目の「不知明鏡里，何处得秋霜」（知らず明鏡の裏、何れの処にか秋霜を得たる）を連想させます。「この一句は李白の詩で有名なんですけどね、実は張九齡の方が先なんですよ。李白は張九齡が長安を去った後に上京していますし、『秋浦の歌』自体が、もっと後に書かれたものですからね。そうするとコレ、李白がパクったんじゃないか、と思えるわけですよ。李白はね、これだけではなくて、パクリの名人ですからね。しかし、これがまたパクられた相手より良い作品なんですよね」。植田先生の解説に一同大笑いしました。パクるかパクられるか、それは問題ではない。後世の人がどう評価するか、古典の世界ではそれが問題だ、ということでしょうか。

さて、話をもとに戻しましょう。四句目は鏡の中の自分と鏡の外の自分がお互いに老いて失意の中にある様子を憐れみあっている、と切ない場面で終わります。たった四行、二十文字でありながら意気揚揚とした輝ける青年期から、失意のどん底の老年期が、さながら映像のように生き生きと描かれています。

今回も植田先生から、作品の時代背景、作者の人生遍歴をたっぷり伺ってから詩の朗読練習に入りました。「張九齡の経歴を知ってからこの詩を読むとより深く理解ができると思いますね。中国の詩は時代を映す鏡でもありますね。逆に時代背景が分からないと半分も理解出来ない、というのが特徴ですね」と植田先生。

「漢詩は時代を映す鏡」とは、なんとサラリと名言が飛び出すことでしょう。正に言い得て妙なり、としきりに頷いていたら、続けて植田先生が

「ところが李白の詩は時代もクソもないですね。読んだだけで、ガシッと人の心を掴む、そんな特徴がありますね。でも、李白は現実の政治には何の役にも立っていないんですがね。」と言われたものだから、一同また笑い出しました。

確かに李白の詩には時空を飛び越えて人の心をわし掴みにするようなワイルドな魅力がありますね。とはいえ、李白には張九齡のように国を背負い立つ政治家としての気概はなく、ひたすら天地を呑み込むような、気宇壮大な詩を作り続けました。また、杜甫のように詩を通して政治をよくしよう、なんて考えはサラサラなかったようです。但しこう決めつけてしまうことには異論もあるようですが……。

さて、この五言絶句は、起承転結がわかりやすく、詩を作る人のお手本になるようなキチンとした構成にもなっています。在職中、孟浩然の就職の世話もしたことがあったことは、前回孟浩然の詩の解説時にご紹介しましたが、作風からもどことなく優しさが感じられます。李白のような天才詩人ではないけれども、素晴らしい人物であり、その人間性が滲みでているような味わい深い作品でした。

さて、二首目は、中唐の詩人張籍です。中唐の詩人と言えば、韓愈、白居易、張継、賈島の名が挙がりますが、韓愈は生涯の師匠、白居易は詩友であり、同じく韓愈を師匠とした賈島とも交流があったようです。剛直で頑なな反面、誠実で心優しく、面倒見の良い人物だったようです。日常のちょっとした想いを何の飾り気もなく、サラッと表現するのが得意だったようです。

この詩は遙か昔の手紙にまつわる内容です。当時はまだ郵便制度も確立していなかったので、手

紙を出すには人に託すしかなく、大変なことでもありました。

qiū sī
秋 思
zhāng jí
张籍

luò yáng chéng lǐ jiàn qiū fēng
洛陽城里見秋風，
yù zuò jiā shū yì wàn chóng
欲作家書意萬重。
fù kǒng cōng cōng shuō bù jìn
復恐匆匆說不盡，
xíng rén lín fā yòu kāi fēng
行人臨發又開封。

らくようじょうり しゅうふう
洛陽城裏秋風を見る
かしよ ばんちょう
家書を作らんと欲して意萬重。
ま そうそう と つ
復た匆匆として説き尽くさざるを恐れ
こうじん た のぞ ま
行人の発つに臨んで又た封を開く。

一句目、洛陽城内で始めて秋風というのを意識した、ということでしょう。「見」は目で視覚的に捉えるというより、「会う」「出くわす」という意味です。「秋風が吹く」というと万人共通に寂しさをイメージしますが、ここではそれに望郷の念が重なります。ふと、故郷の家族に手紙を書きたいという思いが湧いてきて、その思いが益々募る様が「万重」という言葉から伝わりますね。

二句目、その後作者は手紙を書いて、封をします。ところが、三句目になって、急いで書いたため書き足りなかったような気がしてきます。そこで、四句目に、行人（手紙を運んでくれる人）が旅立つ前にまた封を開くのです。

「最近ではメールを使うようになって便利になりましたけど、私なんか昔、書き終わった手紙をポストに入れる段階になって、字を間違っていたかな？と心配になって封を開け直したこと

があったような無かったような……。そんな気がします。皆さんもこういう事って、あったかもしれませぬ」と植田先生。そういえば私も何度かそんなことがあったな、と思い出しました。私の若い頃はまだ文通はさかんにやっていたから、手紙を書いて封をする時の気持ちや家族や友人、時に恋人から来た手紙の封を切る時の気分なんかも……。この詩を鑑賞しながら、新鮮な気持ちで思い出すことができました。

今は、私も両親や息子とラインでやり取りする時代になりました。30年くらい前までは想像も出来なかったことですね。

この詩の作者は、長い旅先にあった、とのことで、最後の一句の「又た封を開く」という表現から、いかに望郷の念が強かったかが伝わってきますね。

「ちょっと俳句に似たような、一見易しそうで、こういう詩が書けたらなあ、羨ましくなるような、実に見事な詩です」と植田先生。

なるほど平易な詩語で真情を伝えるのを得意とした人の作品だけあるな、と思いました。ありふれた日常の一コマでありながら、心がホッコリとして、それでいてなぜか記憶に残る印象的な場面。じっくり心に効いてくるのを感じます。

この作品は中唐という時代背景もあってか、ピッタリと規則に則ったキチンとした構成になっています。盛唐の頃はまだ型破りな作品もみられましたが、中唐の時代は科挙に漢詩が出題されたため、型通りの詩が多いのが特徴なのだそうです。しかし、型通りの作品であっても、作者の人となりというものは、こうして作品に滲みでるものだなあ、とつくづく思った次第です。

山道を辿って 李晴 (2000年2月号より)

あれは雨がよく降る季節だった。私が巡鎮中学（高等中学、日本の高校に相当）への入学通知書もらった時、巡鎮へ行く道は雨水で崩され何日も車の往来が出来なかった。8月（農曆）の村はもう充分秋の気配が深まっていた。

私は家の門のところに佇み、ぼんやりとした靄の向こうの、村の入り口へ通じる道を眺めていた。それはごくありふれた石の道で、天気の良い日には1日1回、陽方口から河曲へバスが通っていた。真っ赤な車体と真っ白な屋根はとても鮮やかで美しかった。しかし、あの雨の多かった8月はすべてが暗く、不鮮明で、気のふさがるような毎日だった。入学手続きの日からもう10日は経っていたが、どんよりと重苦しきの立ち込める空には依然として一筋の光すら見えなかった：雨、速くもなければゆっくりでもなく、ただ、ただ、降ってくる雨。ちょうど何もかも策が尽きようとしていた時、家の者が、役場から車が出て遠回りをして河曲へ行くと聞きつけてきた。母はすぐに私をその車に乗せて巡鎮へ行かせることにした。

私の村から巡鎮までは約100里（約50km）もあり、母は私を独りで行かせることをとても心配していた。しかしどうしようもないことだった。当時私の父は軍人として遠く離れたところにおり、祖父は生来とても内気で人と話をする事が出来ず、家から遠く離れることなど出来ることではなかった。曾祖父はといえば、頭脳明晰で実行力に富んだ人であり、若い頃には外へ出てあちこちで働いたこともあったが、もうすでに80才を越え、充分老人の域に達していた。

そんな雨の降るある日、どうやって荷物を持って役場まで行ったのかはっきりとは思い出せないが、私のやって来るのを待っていた車はすでにブルンブルンと音をたてエンジンをかけ、広く水を被っている道の端に停まっていた。今思い起こしてみると、あの時曾祖父がずっと私を役場まで送ってきてくれていたのだった。私が車に乗り込むとき曾祖父は「雲雲（私の幼名：彩雲）、姥姥（ラオラオ）はここまでしか送らないが、大丈夫だな、ん？」と私に切々と話し掛けた。曾祖父のことを私は土地の習慣から姥姥と呼んでいたのだ。

曾祖父は車の周りを往ったり来たりしながら運転手と世間話をしていた。私が巡鎮へ行くということを聞いた運転手は驚いて「この車は巡鎮へは行かないよ、途中で河曲へまがるんだ」と言った。それを聞いた途端私はぼう然とし、ただ足下の大きな荷物を見つめるばかりだった。曾祖父は素早くさっと車に乗り込み運転手に向かって言った：「少しでも行ければそれでいいよ、曲がるところに来たら車を降りる。残りの10里や20里なんて歩いてもたいしたことはいさ」。そうして曾祖父は私の側に来て腰を下ろした。

車が動き出した時、雨はまだ降っていた。斜めに降ってくる雨の糸は車の窓ガラスの上を音もなく軽く叩いていた。曾祖父と一緒に来てくれることになり、私は密かにホッとした。父が軍役で家を空けてから10数年、日頃母は私を可愛がり大切にしてくれたが、しかし時には年の若い母にとって思うようには事が行かないこともあった。

とりわけ私が小学校に上がったはじめの2年は毎日送り迎えの人間が必要だった。母は病気がちで、おまけに幼い妹もいたため、私を送り迎え出来るのは曾祖父しかいなかった。夏の真昼、外は焼けるような暑い陽射しの頃、ひんやりと涼しいオンドルの上でぐっすりと昼寝をしていると、ジーッと学校から授業開始の予鈴が聞こえてくる。私はコロコロッとオンドルの上を転がり、起き上がり、泣き始める。遅刻をするのではないかとビクビクし、泣きながら学校へ走って行ったものだった。よく靴が脱げ、手にぶら下げて裸足で学校へ行った。

私はまたとても怖がりだったので、分かれ道や、軒の下、樹の根元などにはいつも何か潜んでいるのではないかと思っていた。ひたすらまっすぐ、頭を下げ、振り返りもせず一気に学校へと走ってゆき、校門にある大きな榆の木の下に着くと、やっと後ろを振り返ってみることが出来た。そしていつも曾祖父の見慣れた小さな体が、私の後ろのそう遠くない所でゆっくりと揺れ動いているのが見えたのだった。明らかに私を送ってきてくれたのだが、曾祖父はまるで関係なくブラブラ歩きをしているように振舞っていた。そんな曾祖父の様子を見かけると村の人はいつも面白がって「ひ孫のことまでも、まだ面倒見なきやいけないのかい？」とからかった。

曾祖父は恥ずかしそうに笑ってくちごもり「この小さな足跡を見に来たのさ、肥った・・・」。曾祖父は私の足跡を辿りながら学校までやって来たのだった。冬になり雪が降ると、曾祖父は必ず早く起きて私のために道を掃いてくれたものだ、家の門から学校までずっと。高校に合格し、

10幾つにもなった人間が、まだ曾祖父に送ってもらわなければならないとは思ひもしなかった。

遠回りをして行くうちに、足下の道は黒々とした平らな幅の広い道になっていた。私達の乗った車はとても大きな車輛だったが、私と曾祖父を除くと他には運転手と役場の司書しか乗っていなかった。車の中は寒々とし、車の外はそぼ降る雨でぼんやりとしていた。道の両側の高い青緑色の楊柳が一行、一行と後ろへ倒れてゆく。遠くの黛青（濃い青）色の山々がまるで羽を伸ばしているかのようにフワッと私達の方へ飛んでくる。

曾祖父は緊張して口を堅く閉じ、一言も話さない。しかし私には曾祖父が内心誇らしく、また些か興奮しているのがわかった。案の定、車が五門楼を過ぎると、曾祖父は饒舌になってきた。いつときすると私に陽面に着いたと言い、またしばらくすると龍門溝にやって来たと教えてくれた。若い頃、曾祖父が出稼ぎに行くたびに通った幾筋もの道。大昔、周の時代に天子が諸侯を試して狼煙を上げた時、最も高く、勢いよく上げた烽火台・・・。

旧県を少し過ぎると突然大きな河が目の前に現れた。ゆったりとした河床、平で広々とし、向こう岸まで目が届かない；ゆるやかに流れる水：まるで一条の黄褐色の緞子の帯のようであり、靄のような細かい雨の中では一片の煙のような雲かともおもえる。「雲雲、これが黄河だ、河のあちは陝西省、向こうは内蒙古・・・」曾祖父は興奮気味に私に教えた。車は黄河に沿って走った。河の面にはポツンポツンと小舟が浮かび、木の葉のようでもあった。河の水は溢れ出て道路にまで達しており、車は水の浅いと

ころをゆっくりと滑るように通って行った。廣大で果てのない黄河の水は私達の足下からまっすぐに対岸の遠い山に連なり、そして遠い山の峰は天まで届かんばかりであった。

私達が車を降りた時にはもう正午ちかくになっていた。人に尋ねてやっと私達が巡鎮にそう遠くない7, 8里のところまで来ていることを知った。雨はすでに止み、アスファルトの道路はぐっしょりと濡れていた。私と曾祖父は荷物を背負い、一步一步巡鎮に向って行った。私は小さな包みを背負い、手には洗面器や食器などを詰めた大きな網袋を下げている。曾祖父は布団包みを背負った。歩き始めの頃は、曾祖父はまだ落ち着いた早い足取りで歩いていた。私は一生懸命歩いてやっとついて行ったのだった。

やがてだんだんと曾祖父の歩みは緩慢になってきた。なんといっても80才の老人である。布団包みの中には毛布や、敷布団、掛け布団ばかりでなく、替えの衣類や、携帯食料、それにたくさんのお酒まで、全部で6~70斤(30~35kg)はあったらどうか。布団包みはだんだんと弛んできて下へずり落ちていった。曾祖父は歩いては止まり、歩いては止まりしながら布団包みを揺すりあげていったが、布団包みを結わえている縄の端は地面を引きずっていた。わたしはといえどももうとっくに動けなくなっていた。

いつも山道を歩くときには8里や10里ぐらいは飛び跳ねるように歩いていたものだが、その日真っ平らで広い舗装道路に行くことは、行けば行くほど先が遠く感じられ、歩けば歩くほど疲れるものだった。私はもう腰をおろして休みたかった。しかし、曾祖父はかえってゆっくりと一步一步前へ進んで行き、一休みしようなどとは考

えもしなかったようだ。私は仕方なくその後ろをついて行った。私の目の前にはただ小山のような布団包みと前になり後ろになる曾祖父の両脚だけがあった。

ついに巡鎮中学の門が見えてきた。門の前には小さな白い橋がかかり、橋を渡ろうとした私と曾祖父は運動場で体操をしていた学生達に取り囲まれた。曾祖父は力を振り絞って前へ進もうとし、私はその後ろで、もう落ちんばかりになっていた布団包みを支えていた。学生達もその後ろについてきた。まっすぐに教務課の入り口に着くと、曾祖父はやっと布団包みを下ろした。曾祖父は汗を吹きながら周りを囲んでいる学生達に言った:「私は今80才だ、これは私のひ孫の・・・」やや自慢げな表情であった。

その夜、曾祖父は学生寮に泊まった。私達の宿舎は全員15, 6才の女子で、皆、曾祖父を姥姥と呼び親切にしてくれた。その翌日朝早く、曾祖父が起きだして持参した食べ物を食べ、帰り支度をしていると、同室の王素娥があからさまに不機嫌な態度を示した。彼女によると、昨夜は曾祖父のいびきと部屋にたちこめた田舎の年寄りの汗臭さとで一睡も出来なかったのだそうだ。彼女は曲峪の出身で、自分ではいづらか都会人とでも思っていたのだろう。私は始めから終わりまで一言も口をきかなかった。救われたのは、曾祖父の耳が遠く、彼女が誰を罵っていたのかよく聞こえなかったことだった。

その日、曾祖父はひたすら歩いて戻ったのだった。100里もの道のりを、丸々一日かかって。家にやっとたどり着いたのは夜もだいぶ更けたころだった。

(岩田温子訳)

海外出張の思い出（ナイジェリア編③）

高島敬明

今回の工事のパートナーであり、キャンプの責任者でもあるHマネの話からお話ししましょう。Hさんは、定年前で50代半ばです。海外での長期の仕事一筋にやってこられた方で、会社でも一目置かれた方とお聞きしました。いつも冷静で白髪混じりのハンサムな方で外国の方、協力会社との折衝では、得意な英語でスマートに対応していました。ハウスキーパーに舌打ちをしながら英語でべらべらとしゃかりつけるのを聞くのは私にとって新鮮な体験でした。統括している上司のSマネージャーからHマネを紹介されたときは、いい方なので大いに安心しました。キャンプの中は綺麗に整頓され、指揮命令系統もはっきりしておりマネージャーの指導力を感じました。当然キャンプは安全のために周囲を高い鉄条網で二重三重に囲まれています。キャンプに隣接してナイジェリアの「グリーンビール」の工場があり、その周りは密集した集落で人がいっぱいでした。ドブ状の川が流れ、変な匂いが鼻に付きます。ビール工場は砂地に建った立派な建物ですが、この川の近くの井戸から汲み上げた水でビールを製造しているのです。深く考えると飲めなくなりますが、夜の食事には必ずこの緑の瓶に入った冷えたビールを飲みました。日本と違って度数が強く7度くらいでした。キャンプの水も同じことですが、なぜか甘くて非常に美味しい水でした。

やっとの思いでキャンプに着いてまもなく私の部屋に案内されました。コンテナハウス1棟の比較的広い部屋です。諸設備は一通り揃っていました。次のような注意事項が書いてありました。<クーラーは24時間止めないこと。靴、スリッパは外に脱いでおかず必ず中に入れること>です。クーラーで外気より室温を下げておくと外から生き物がコンテナの中に入らないとのこと。生き物と言っても、蛇、サソリ、40cmくらいのトカゲなど物騒なものばかりです。後々の話ですが、作業員の悲鳴で飛んでいく

と外に一晩置いた靴にサソリが入っていて刺されたそうです。足はグローブのように腫れてひどく痛い思いをしたそうです。部屋の外にはマンゴーや椰子の樹などがありましたが、そこら中に先程の40cmくらいの大トカゲが首を上下に振り長い気持ちの悪い舌をへらへらと出しながら動き回っています。無害とはいえ、初めてみるものには気持ちのいいものではありません。追っ払っても追っ払っても集まってきます。向こうにしてみれば見慣れないものが来た、との珍しく見物しているのでしょうか。やはりアフリカ大陸は異質な大陸でした。

夕方になって、魚国のT料理長は新人の高島さんが来たので、いつものように日本の食材を使った料理で歓迎してくれるというのです。総勢20人くらいの少なくなった人達でビール、ワイン、ウイスキーで歓迎していただきました。日本の食材を使った料理は、エビがいっぱい入った焼きそばでした。料理長苦心の逸品だそうです。食材の輸入は原則禁止の国ですから、外国の食材は無いわけですが「蛇の道は蛇」で料理長が集めて来たそうです。皆さん歓声をあげて酒のつまみにしながら少しづつ食べていました。コメはカリフォルニア米、その他の食材は現地のもは一切使わず、すべて英国のキングスウェイというデパートから仕入れているのだそうです。



私の運転手ビアフラの戦いのエマニエル大尉(キャプテン)。気のいい2児の父親で黄熱病を持っていて何時も微熱がある。

ナイジェリアはイギリス連邦加盟国なので食材の輸入は原則禁止でもイギリスは OK なのでしょう。キングスウェイは日本の三越のような英国のデパートだそうですが、ラゴスの町に何か所あるそうです。ここでもいい肉や魚が手に入らないので、大方の料理はこのエビで味付けされます。エビは日本の大洋漁業が大西洋で採って瞬間的に冷凍したものです。

飲むほどに酔うほどに皆さん大きな声で話していましたが、ただ一人物静かに食事をしている人がいました。紹介されて以来じっくりと話す機会の無かったキャンプマネージャーの H さんでした。私が今日の歓迎会のお礼に伺った時、「高島君座りなさいよ」と空いていた隣の席を指さしました。一人でどんどん話出します。《海外生活が長く酒で体を壊し今は酒は殆ど飲まない。肝臓は肝硬変で自分の拳ほどしかない。定年まで勤められるかどうか。》と、一気に青い顔に神経質そうなしわを浮かべながら話して行きます。そして「明日金曜日にはラゴス市の中心バービーチにある支店に行って、全体の工事の物流・資材調達・ナイジェリア国との折衝などを任された上司の S さんに会いにつれていくから」と告げられました。

翌朝 H マネの車をマイケル軍曹が運転して事務所に向けて出発しました。車中で

H マネは、「ナイジェリアは軍事革命でオバサンジョが大統領になりました。革命政権なので武器を持っていたり不審者は即刻その場で射殺してもいいことになっています。交通事故を起こした時は速やかに現場を離れなさい。犯人を捜しただけの警察力はないし、集まって来た群衆にリンチに遭い殴り殺されます。とにかく黒人は信用してはならない」と強く言いました。そのうち高速道路が渋滞で走れなくなりました。すると車の周りを子供たちが取り囲んで来ました。洗車ブラシを持ったものは車のガラスを磨かせてくれと言っているのだそうです。手を出している子供たちは物乞いです。よく見ると手先の一部が溶けたように無くなっていました。H マネは大きな声をあげて英語で口汚く罵ります。そして小銭を遠くに投げてやります。私も両替したばかり

の硬貨を小さな手に載せてやりました。H マネは「高島君お金を投げるんだよ！」と大声で言いました。子供たちはライ病のために指の一部が無くなっていたのでした。ようやくこの場を通り抜けようやく C 化工建設のラゴス支店に着きました。海岸沿いの眺めのいい 3 階が S マネージャーの部屋でした。部屋にはガーガー言っている短波の無線設備がありました。短波でも無線通信をしているのです。S マネは、「今日はだめだよ。サイト（1000km 遠方の町）と連絡を取っているのだが繋がったり切れたりして話ができない。途中でスクールとか、雷とかで天候の悪いところがあるのだろう。」とっていました。当時は紙テープでの通信が主流の時代で、多くの内容を送付するのには不十分でした。S マネは「高島君、今回のプロジェクトは貴方の会社が主流だから前の所長のように頑張ってください。期待していますよ。」とそれだけ言われて終わりました。すると H マネに向かって「H 君今日は金曜日だから午後罪人の処刑があるよ！」と、半分は私に見せたいように声をかけました。事務所の窓から真正面の 500 メートルくらい先に見えるそうです。何のことなのか聞きますと、バービーチはラゴスで一番の海水浴場ですが毎週金曜日のイスラム礼拝日に海岸の端で銃殺刑があるとのことでした。2 時過ぎでしょうか、誰かが「いまから始まるぞ！」と言いました。太鼓の曲に合わせて 15 人くらいの人が踊りながら出て来たようです。笑っている感じなので誰だろうと思っていたら死刑囚本人とのことでした。信じがたいことですが、回教では銃弾で死んだ場合は必ず生き返るので、だから踊りながら笑いながら出てきて喜んで死んでいくのだそうです。後は文章にできないのでご想像にお任せします。こうした思想は恐ろしくてとても理解できませんでした。ナイジェリアの病巣を見た思いでした。このような場面に遭遇してしまい何かイヤなことが起こりそうな予感がしながら、すっきりしない気分でその日はキャンプに戻りました。それから今後の主な仕事場であるラゴス港岸壁を見て回ったり、協力会社の運輸会社に挨拶に伺ったり一週間がアツという間に過ぎ去りました。（続く）

【中国の笑い話】42「365夜笑話」より

▲第143話 指と頭を使う

小豆は、算数の問題を解くとき、いつも手の指を使う。手の指が足りなくなった時は、足の指も使う。でも、最近それでも足りないことが多くなった。心配して姉に訊いた。

小豆「手の指と足の指を全部使っても足りなかったら、どうすればいいの？」

姉「指が足りなかったら、頭を使えばいいじゃないの」

小豆「頭は一つじゃないか。頭を入れて数えても、あんまり助けにはならないよ」

▲第144話 “一”が大きくなった！

正岡という日本婦人が、公子という幼児を預かった。正岡は、公子に字を教えようと思い、先ず、掌に「一」を書いて教えた。

翌日庭を散歩している時、正岡は杖で地面に「一」を書き、公子に訊ねた。

正岡「これは何と読むの？」

公子「知らない」

正岡「昨日、掌に書いて教えたじゃないの？忘れてしまったの？」

公子は驚いて叫んだ。

公子「昨日の‘一’が一晩でこんなに大きくなったんだ！」

▲第145話 三階だけが欲しい

昔、或る金持ちが三階建ての素敵な建物を見て素晴らしいと思い、早速大工に同じようなものを注文した。注文を受けた大工は、レンガを一つ一つ積上げる作業を開始した。それを見た金持ちは大工に訊いた。

金持ち「あんたは、どんな建物を作る積りなんだね？」

大工「あの三階建ての建物を真似て作る積りです」

それを聞いた金持ちは怒りだした。

金持ち「私はあの三階だけが欲しいんだ！下から積上げるようになって注文していないぞ！」

▲第146話 違っていたら苦情を受けます

或る人が占い師に頼んだ。

或る人「私は何歳まで生きるか、教えてください」

占い師は筮竹を操って調べたのち言いました。

占い師「あ、あなたは長生きしますよ。94歳までは生きるでしょう。」

その後で、占い師は自信たっぷりに付け加えた。

占い師「もし94歳まで生きられずその前に死んだ時は、直ぐに私のところへ文句を言いに来てください！」

▲第147話 農民の訴え

冷害による不作の為、農民が県の役人に免税を訴え、県の役人が調査にきて詳細を調べました。

役人「今年の麦の収量はどれくらいだね？」

農夫「3割です。」

役人「綿花はどれくらいだね？」

農夫「2割です。」

役人「稲の作柄は？」

農民「2割です」

これを聞くと役人は怒りだした。

役人「今年の平均作柄は7割だと！お前は被害を誇張して話しているのだろう。虚偽の申告は処罰の対象だぞ！」

農民は慌てず言い返した。

農民「いやあ、今迄百数十年生きて来て、最悪の作柄ですよ！」

役人は、農夫が年齢を偽ったのに酷く腹を立て、厳しく非難しました。農夫はすまして答えました。

農民「本当のことですよ、お役人様。計算してみてください。私は今年70歳を過ぎています。長男は40歳過ぎ、次男は30歳過ぎですから、合計したら百四十歳を過ぎます。三人ともこんな不作は初めてですから、百数十年ぶりの凶作ですよ」

(有為楠君代 訳)



【活動報告】‘わんりい’料理の会

ハーズ シャンジャオビン

春ニラと海老の合子 と 香蕉餅 (バナナの点心)

場所：麻生市民センター 講師：郁唯

ニラは、疲労回復に欠かせないビタミン B1 を高めるβ-カロチンやアリシンを含むほか、ビタミンやミネラル豊富でさまざまな体調改善に注目されている野菜です。そのニラの、一番おいしいといわれる春ニらをたっぷり頂ける中国東北部のおやきの一種・「春ニラと海老の合子」とバナナの点心・「香蕉餅」を教えてください。

‘合子’という名のおやきはこれまで聞いたことがなかったが、簡単に言えば、直径12~15cm程に伸ばした大型の餃子の皮に餡を入れて二つ折りにしてフライパンで焼くだけである。縁をひらひらした洋菓子のようなフリルを付けて成型するが、作り方はいたって手軽でシンプルだが、焼き立ては、ぱりぱりのホクホクでとっても美味しい。

指導くださった郁先生も、最近は餃子より合子を作る方が多いとか。食欲旺盛な中学生や高校生の男の子でも身近にいれば一緒にはべらせてわいわい言いながら作って焼いてもりもり食べて、作り方を伝授したらよろこばれるだろうなあなどと思った。

今回は、エビとニラと卵と少々贅沢な餡だったが、中に包むものは何でもよいそうで、長野のおやきの餡が頭をよぎった。小麦粉と餡になる物さえあれば、ちよちよと焼いて、ちよちよと小腹が空いたとき、試験勉強の夜食などいいかも。ま、コツは皮の捏ね方であって、以前、中国の留学生たちと餃子作りをした時、皆、口をそろえて、皮は伸ばせるけど粉は捏ねられないとってたから、餃子の皮捏ねに慣れるまでは試行錯誤もあるかもだ。頑張ってみよう。

さて、「香蕉餅」は中国風というより東南アジア風の点心で、こちらは薄いふんわりした皮にバナナの薄切りと溶き卵を流し込んで焼きながら成型する。私など皮を伸ばすのが不得手で、なかなか思うように綺麗に伸ばせない。しかも、伸ばした皮をフライパンに移動するのも結構コツが必要のようだ。とはいえ、焼き上がってしまえば途中の不手際も一緒

になんとか焼き込んでしまえるから、怖がることはないようだ。ふんわりし



た口当たりと焼きバナナの香りと風味が堪えられない。こっちはきっと中高の女生徒たちが喜ぶだろうなあ。

今回の講座の参加者は、14名で、講師のデモの後、5名ずつ3テーブルに分れてそれぞれが腕を振るった。



【ランチメニュー】

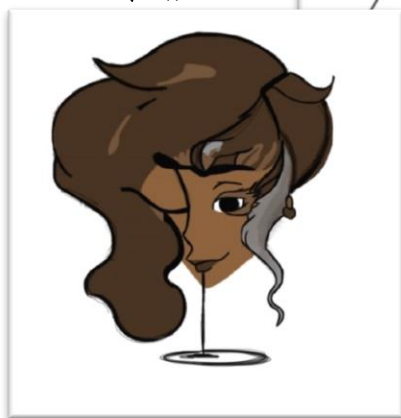
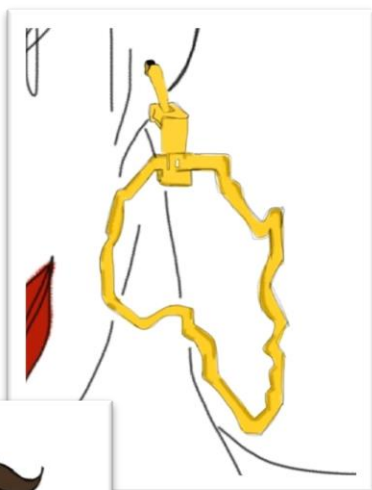
- ・海老とニラの合子&香蕉餅
- ・春雨と白きくらげとハムの中中華サラダ
- ・中華風コーンスープ
- ・杏仁豆腐の蓮の実と棗の甘煮とパイナップル入りシロップ掛け

※レシピは‘わんりい’HPをご覧ください。

(報告：田井)

ようこそ！ SAMIRA イラスト館へ

フランスからはるばる届いた、サミラさんのイラストから、皆さんはどんなことをイメージされますか。



‘わんりい’ は、新入会をいつでも歓迎します

年会費：1500円 入会金なし

郵便局振替口座: 00180-5-134011 わんりい

途中入会の方には会費の割増があります。

下記へお問い合わせください。

問合せ：044-986-4195 (寺西)

‘わんりい’ の名は、‘万里’ の中国読みから付けられました。文化は万里につながるの想いからです。

主としてアジア各国から来日の方々と協力して文化交流活動を続け、国や民族を超えた友好を深めて来ています。会員になりますと、

①年10回(2月・8月を除く)、会誌‘わんりい’を送付

②‘わんりい’の活動の全てに参加できます。

◆インターネット会員の制度もあります。メールアドレスを頂いた方に、毎月、美しいカラー版‘わんりい’をお送りします。こちらは無料です。

◆町田国際交流センター(町田市民フォーラム4F)、町田生涯学習センター(109ビル6F)、中国文化センター、川崎市国際交流センター、神奈川県立地球市民かながわプラザ・他でご自由に取って頂けます。上記へお問い合わせください。

【‘わんりい’の原稿を募集しています】

‘わんりい’は、2月と8月を除く毎月発行の当会の会報です。主として、会員と会の関係者の皆さんの原稿でまとめられています。海外旅行などで体験された楽しい話、アジア各地の情報やアジア各地で見聞した面白い話、これ

はと思う楽しいイベント情報などを気軽に寄せ下さい。



★6月の定例会

6月18日(火)…13:30～ 三輪センター第三会議室

★7月号おたより発送日

7月1日(月) 10:30～ 三輪センター

第二・第三会議室 (弁当持参)

‘わんりい’244号の主な目次

寺子屋・四字成語(23)两袖清风……………2

論語断片(47)君子亦有穷乎?……………3

お爺さん三人の大連の旅(4)……………4

東西文明の比較(35)倭国と日本国……………6

四姑娘山写真だより(44)女王谷の神々(2)湖の王女……8

「漢詩の会」(30)

張九齡の「鏡に照らして白髪を見る」……10

山道を辿って……………13

海外出張の思い出(ナイジェリア編③)……………17

中国の笑い話 42……………18

【活動報告】‘わんりい’料理の会……………19

サミラさんのイラスト館……………20

‘わんりい’掲示板……………別刷

【お詫び】

‘わんりい’243号(5月発行)の20ページ「白居易登場」のコラム1行目を下記のように訂正します。

韓国へ歴史白居易登場の旅を楽しむ。⇒ 韓国へ歴史の旅を楽しむ。

尚、訂正した全文は‘わんりい’HPに掲載の5月号PDF版でご覧ください。‘わんりい’編集室